

倉庫建設に伴う

植附遺跡第19次発掘調査概報

2009. 3

東大阪市教育委員会

1 調査に至る経過

植附遺跡は、東大阪市西石切町1～3丁目、中石切町1・3丁目にかけて広がる、弥生時代前期から中世期の集落跡である。

昭和37年、小規模な調査の結果、弥生土器の出土があり、遺跡として周知されるようになった。その後、昭和57年から同62年にかけて実施された近鉄(現)けいはんな線の新設工事や国道308号線の拡幅工事に伴う調査で、縄文時代にさかのぼる自然河川の発見があり、現在、この河川の北側を植附遺跡、南側を西ノ辻遺跡として埋蔵文化財包蔵地を区分している。遺跡は東大阪市東部のやや北側に位置している。遺跡の範囲は東西約630m、南北約630mの規模と推定されている。現在の標高で5～22m前後を測る。

平成20年2月、東大阪市西石切町1丁目52・53番地において倉庫増築工事が計画された。このため、「埋蔵文化財発掘の通知」の提出をうけ、直ちに届出者と協議に入った。工事地は周知の植附遺跡の範囲内にあり、なつかつ第1次調査地の敷地に該当することから、工事実施により埋蔵文化財が破壊されることが懸念され、事前の発掘調査を実施することとなった。調査は東大阪市教育委員会文化財課が担当し、平成20年4月28日から5月16日まで実施した。調査面積は46.7m²である。

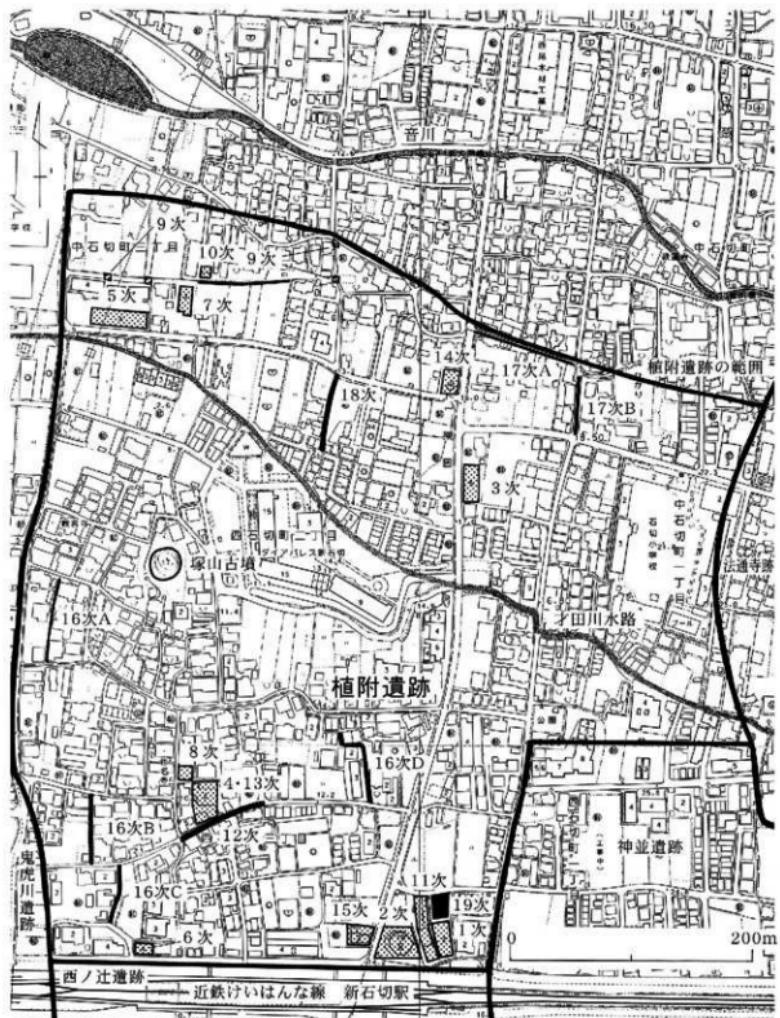
2 既往の調査と調査地の位置、周辺の遺跡

植附遺跡では、今まで18次の調査が実施されてきた。まずその状況を摘記しておきたい。

前記したように、植附遺跡の南端は自然河川で区分され確定した。いっぽう、北端は音川ないしその先行河川が形成する自然堤防の南側まで遺跡が広がると考えられてきた。ところが遺跡の中央を南東から北西へ流下する才田川水路が横断しており、才田川水路の北側と南側で大きく植附遺跡が二分されることが考えられる。

才田川北側(遺跡北地区とする)では、第3次調査で古墳時代中期の竪穴住居1棟・溝・土坑が検出された。その北側の第14次調査では古墳時代中期後半から後期の溝・土器溜まり、飛鳥～奈良時代の耕作地が見つかっている。遺跡北地区の最西端に位置する第5次調査では、弥生時代前期の竪穴住居2棟・土坑・溝・ピット、弥生時代中期の土坑・溝・ピット、古墳時代中期末から後期にかけての小型低方墳7基が発見されている。以上の状況を総合すると、第3次調査地を中心とした一帯に古墳時代中期後半から後期にかけて営まれた集落域が広がり、集落の西方には小型低方墳が築かれ、墓域が形成されたことが推定される。その下層には、弥生時代前期から中期の集落が認められる。

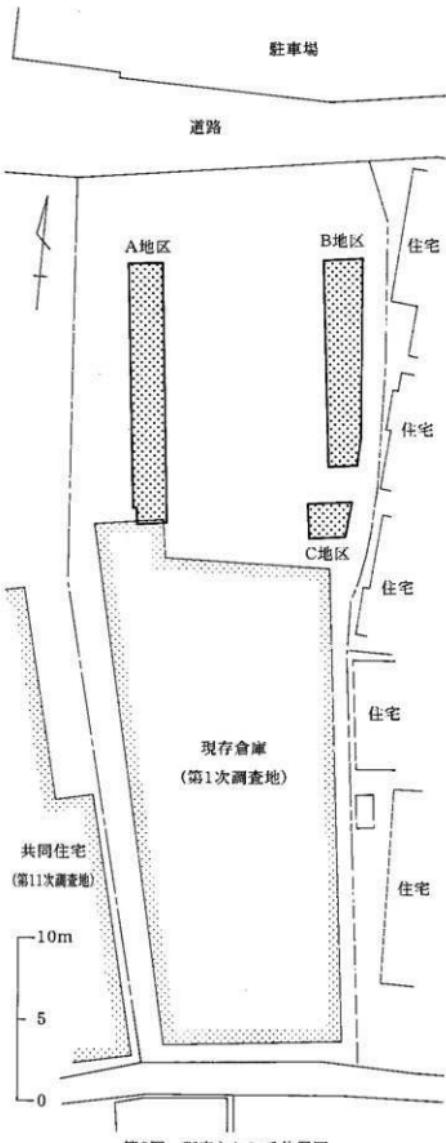
才田川南側(遺跡南地区とする)では、西ノ辻遺跡と接する最南端で、第1次、2次、11次、15次の調査が実施されている。第1次調査の成果については後で詳しくみるためにここでは省略しておく。第2次調査では、トレンチの南半部に集中して鎌倉～室町時代の土坑・井戸・ピットが検出された。とくに井戸・土坑から合計4点の呪符が出土し、この中世集落で祭祀を行っていたことがわかる。第2次調査地と今回の調査地との間にあたる第11次調査では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物16棟・井戸・溝・土坑・ピットが約306m²の調査地全域にわたって検出された。調査では遺構の方位・重複関係や出土遺物から、これらの遺構を6期に区分しその変遷を追っている。第2次調査地と道路を接した第15次調査でも、激しい搅乱の隙間から鎌倉～室町時代の遺構が見えている。第1次調査でも同時期の遺構が発見されていることから、少なくとも東西100mの範囲に該期の集落が間断なく営まれていたことが判明した。なお、これらの調査では、中世期の遺構面とほぼ同一層準で弥生時代中期の遺構が確認された。中世期以降に削平されたものが少なくないと考えられている。



第1図 植附遺跡の発掘調査地点位置図【財団法人東大阪市文化財協会2002を改変、補足】

(本図は調査地点を概括的に示したものであり、図示の範囲と個々の調査面積とは比例しない)

植附遺跡は、音川左岸・才田川両岸の自然堤防の微高地上に立地する。両河川とも生駒山地西麓部



第2図 調査トレンチ位置図

に所在する、山あいを流下する河川であるので、それらが形成する扇状地の中央部から末端の低位に位置することになる。植附遺跡周辺の地質・地形条件については、詳しくは(松田1996)を参照していただきたい。

東大阪市東部の扇状地中央から末端にかけて南北を走る旧東高野街道際には、植附遺跡をはじめとする集落跡が多く散見される。旧東高野街道の前身として、弥生時代以降の集落間を繋ぐ古道が存在したと推定されることがある。とくに植附遺跡周辺は、遺跡の分布が濃密である。隣接する遺跡に限っても、まず東方に神並遺跡がある。神並遺跡は近畿地方の縄文時代早期押型文土器文化を代表する遺跡で、これまで集石や焼土坑など生業関係の遺構が見つかり、押型文土器が多量に出土した。この押型文土器に伴う土偶も3点発見されている。また古墳時代中期末の集落跡も見つかっている。鍛冶関連遺物が出土し、祭祀跡も併せて発見された。集落の様相がうかがわれる資料となっている。神並遺跡の北側には法通寺跡がある。法通寺跡の主要伽藍は式内社の石切御箭神社の境内に位置し、出土した軒瓦から白鳳～中世期まで存続した寺院であることが判明している。植附遺跡の範囲内、中央やや西よりに塚山古墳がある。本格的な発掘調査は実施されていないが、墳丘から5世紀前半の円筒埴輪が採集された。東大阪市内にあって数少ない中期古墳として注目される。植附遺跡の西方には、鬼虎川遺跡が広がっている。鬼虎川遺跡は、河内湖東岸の縁辺に所在する弥生時代中期を代表する拠点集落である。遺跡範囲の議論が続いているが、弥生時代の拠点集落の中心と目される、国道308号線と同170号線の交差点南側から、北西側に縄文時代晩期末から弥生

時代前期初頃の貝塚が発見されている。鬼虎川遺跡では、以前の調査で銅鐸・銅鉗・銅鐵の鋳型が出土していたが、近年の調査で銅劍の鋳型が発見された。さらに黒変部を有する石製品が出土していることから、鬼虎川遺跡が拠点集落であるとともに、青銅製品の大生産・供給センターであることを示している。

これらのように、植附遺跡周辺の遺跡の様相から、本遺跡を含む地域で縄文時代の古くから人々が活発に活動していたことがうかがわれる。

3 調査の概要

(1) 調査方法

計画の工事では、杭工事のフーチング部分が現地表(以下「GL」とする)約1.7mと深くなることから、フーチングを南北に連続した箇所を調査トレンチとした。この結果、東西方向に南北トレンチが併行する形となった。便宜的に西側のトレンチをA地区、東側をB地区と仮称して調査を進めた。B地区の南側には、やや離れた箇所にフーチングがあり、これはC地区とした(第2図)。調査は、A～C地区の南側にある現存倉庫の営業確保が必要であり、調査排土を場内に仮置きすることとなったため、まずA地区を調査し、その終了後にB地区・C地区を併せて調査する方法を探った。出土遺物の位置記録や検出した遺構の実測図作成のため、基準点・調査点測量を実施した。測量は調査依頼者があらかじめ用意された株式会社島田組が行った。

基準点・調査点測量に伴い、地区割を行った。A地区ではB・C地区と比べて遺物の出上があったため北からA1区・A2区・A3区に3分割して遺物を取り上げた(第3図)。

現地調査では、第1次調査の層位に準拠して掘り下げを行った。まずA～C地区的現地表面(アスファルト舗装)および近現代の耕作面である第1層・第2層を重機にて除去した。また第3層についても土壤の色調や土質からその堆積時期が中世期から大きく下ることが予想されたため、併せて除去した。第4層およびその下層については人力で掘削し、遺構・遺物の検出を図った。なおアスファルト面のGLはT.P約17.4mを測る。

(2) 層位

今回の調査で確認した層位は以下のとおりである。

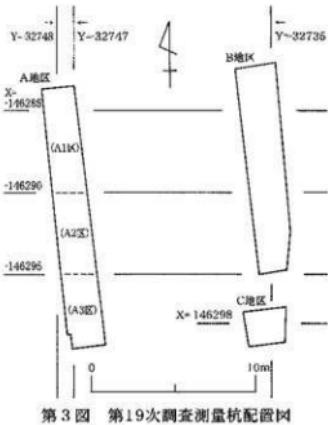
第1層 暗青灰色(5BG4/1)粗粒砂混じりシルト。旧耕上層。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂混じりシルト。床土層。B地区北側のみ第3層を切り込む土層があった。これを第2L層とした。

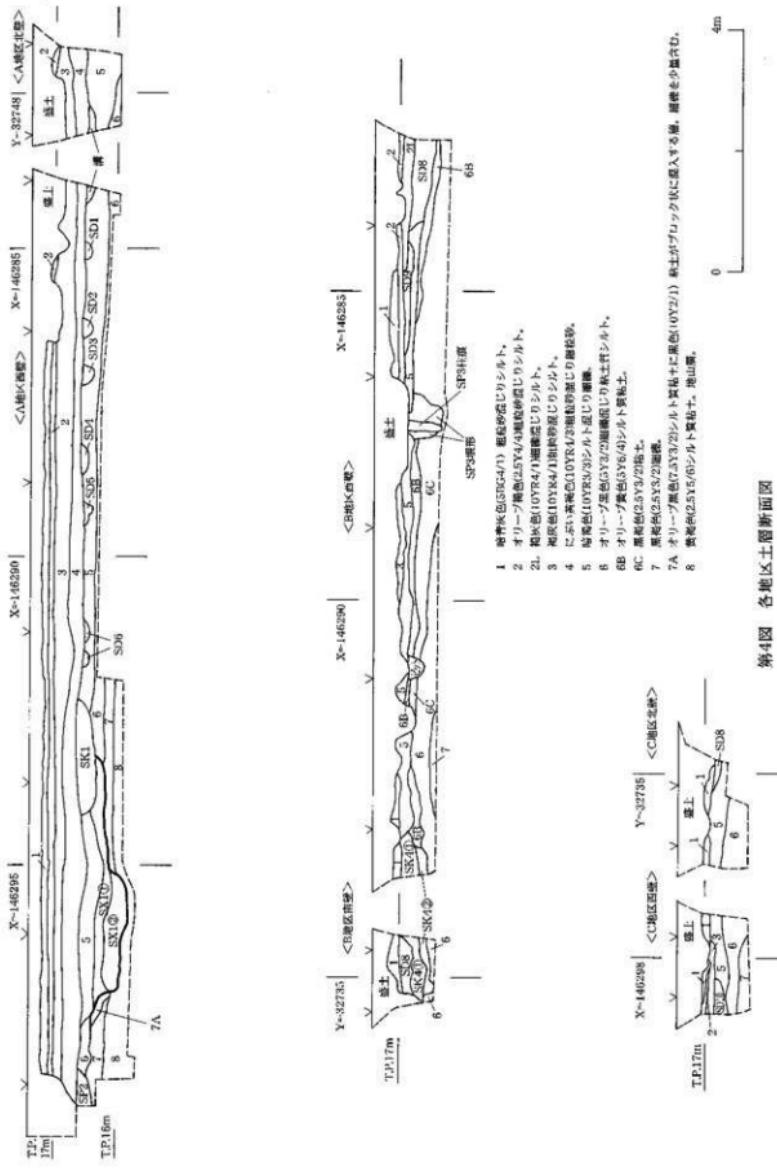
第2L層 純灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト。

第3層 純灰色(10YR4/1)粗粒砂混じりシルト。細片化した土師器を微量に含むが、ほとんど無遺物であった。

第4層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混じり細粒砂。上面はきわめて堅くマンガン粒の沈着がみられた。風化した瓦器焼片や上師器皿片が出土した。上面は中世期以降、床土として利用されたものと思われる。第4層はA地区のみで見られ、B地区では第3層の直下に第5層が露出していた。このことからA地区とB地区との間に耕作に伴う低い段が介在する可能性がある。



第3図 第19次調査測量杭配置図



第4図 各地区土壤断面図

第5層 暗褐色(10YR3/3)シルト混じり細礫。上面はA～C地区の遺構面Ⅰをなす。土壌の色調は地山層に近似するが、締まった土質ではない。

第6層 オリーブ黒色(5Y3/2)細礫混じり粘土質シルト。上面はA地区では落ち込み状遺構SX1の遺構面Ⅱ、B地区ではピット・土坑の遺構面Ⅱをなす。

第7層 黒褐色(2.5Y3/2)細礫。SX1の南肩には、第7層との間に土層が堆積していた。これを第7A層とした。

第7A層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粘土に黒色(10Y2/1)粘土がブロック状に混入する層。細礫を少量含む。ブロック土であることから、人為的にSX1の南肩に貼付したことが考えられる。

第8層 黄褐色(2.5Y5/6)シルト質粘土。地山層。

(3) 検出した遺構

A地区、B地区とも二面の遺構面を確認した。調査地のトレーンチ幅に制約されたために、土坑・ピットの区別は便宜的なものである。C地区では下層の遺構はなかった。以下、地区ごとに説明する。

A地区(第5図) 遺構面。は第5層上面で検出したもので、土坑2基・ピット2個・溝7条がある。ピットの規模・埋土・出土遺物等は第1表にまとめたので参照いただき、説明を省略したい。

土坑 SK1はA-2区で検出。平面は隅丸方形、断面は蒲鉾形を呈する。長径1.92m短径0.60m深さ0.24mを測る。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫混じり粘土質シルトにオリーブ黒色(5Y3/2)粘土がブロック状に混入する層である。ブロックは大きめ5～6cmを測る。土師器・須恵器が出土した。SK2はA-3区で検出。平面は円形、断面は皿形を呈する。埋土は暗青灰色(5B4/1)細礫混じり粘土である。弥生土器が出土した。

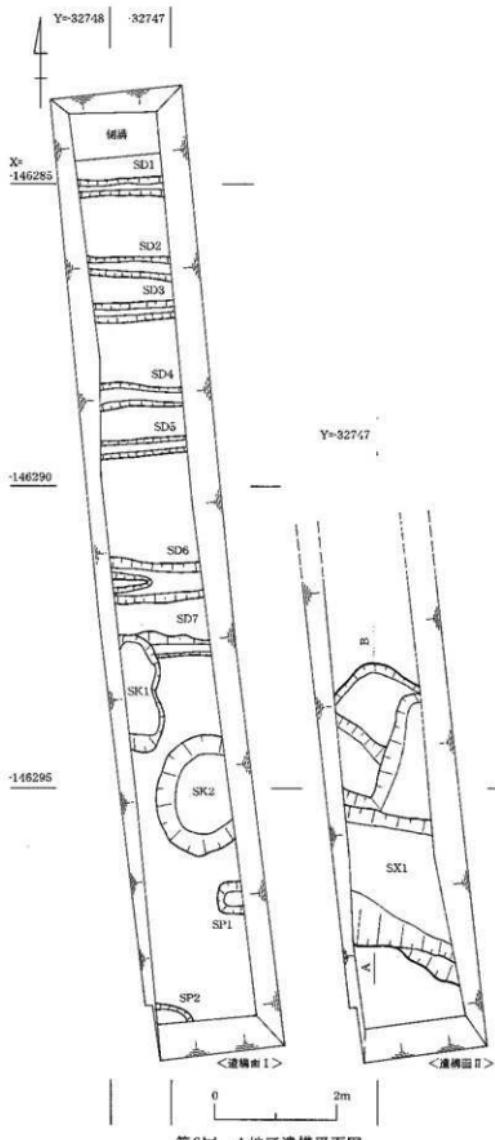


第5図 A地区西側断面写真(西から)

第1表 ピット一覧表

遺構番号	地区	遺構面	平面形態	規模(cm)			埋土	出土遺物		
				長径	短径	深さ		土師器	須恵器	その他
SP1	A-3	I	方形	52	41+	20	暗青灰色(5B4/1)細礫混じり粘土	○	×	×
SP2	A-3	I	梢円形	56+	31+	11	黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土	×	×	×
SP3	B	II	円形	70	26+	57	〔柱痕〕黄褐色(2.5Y5/4)粘土 〔掘形〕灰色(N4/0)細礫混じり粘土	○	×	×
SP4	B	II	梢円形	52	12+	11	灰色(N4/0)細礫混じり粘土	×	×	×
SP5	B	II	円形	26	24+	13	灰色(N4/0)細礫混じり粘土	×	×	×
SP6	B	II	円形	46	42	19	灰色(N4/0)細礫混じり粘土	○	×	×

(注) 規模欄で数字ヨコの+は以上をあらわす



第6図 A地区遺構平面図

溝 7条検出した。7条ともに底面レベルで東西方向にほとんど差がなく、溝水状態であったか、排水以外の機能を有したかと考えられる。7条とも断面形は蒲鉾形を呈し、埋土は全てオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂混じりシルトである。また流向はほぼ基準杭の座標軸に沿っている。このうちSD1からSD5は最大幅0.28~0.44m、深さ0.05~0.07mの規模で均質である。SD6は最大幅0.77m深さ0.04m、SD7は最大幅0.41m深さ0.04mを測る。SD1・SD2・SD6・SD7から土師器、SD3から土師器・弥生土器、SD5から土師器・須恵器がそれぞれ出土した。

遺構面Iの溝は耕作に伴う蠅溝と考えられる。また土坑の埋土で耕土に近い色調をもつものがあることから、これらも耕作に関連する機能を有したと考えられる。出土遺物には遺構の營造時期より古相を示すものが認められることから正確な所属時期は不明であるが、B地区遺構面Iの状態や出土遺物から、宝町時代あるいはそれ以降の所産と推定できよう。

遺構面IIは、第6層上面で検出したもので、落ち込み状遺構SX1がある。SX1はA-2~A-3区で検出。北肩は緩やかな傾斜面をもち、南肩にかけて鉢状に凹む。従って断面形については上位は土坑状、下位は溝状を呈するような形態をとる。検出した最大幅は約5.1m深さ0.45mを測る。埋土は2層に区分される。土坑部分にあたる上位①層は、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粘土で細縫を含む層であ

る。溝部分にあたる下位②層は黒褐色(2.5Y3/2)粘土で、下部は第8層を小ブロック状に含む層である。Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器が出土した。

遺構面Ⅰと検出面が異なっていること、出土遺物に弥生土器のみが認められることがから、弥生時代の遺構と考えられる。第1次調査で検出した弥生時代遺構との位置関係については後述する。

B地区・C地区(第10図)

遺構面ⅠはA地区と同じく第5層上面で検出したもので、溝3条がある。B・C地区併せて説明する。

溝SD8はほぼB地区的トレンチいっぱいに広がる南北溝である。断面形は皿状を呈する。B地区的南端で東肩がわずかに検出できたほかはトレンチ外へ出る。溝底面のレベル差から南から北へ流下し、北側で緩やかに西へ屈曲する。南端で幅0.98m、北端では1.70m以上の規模で、深さは0.25mを測る。溝底面に2箇所小ピット状の凹みがある。なお、C地区にもSD8と流向を同じくする溝状の落ち込みがあり、SD8の一部と捉えられた。埋土はオリーブ灰色(10Y4/2)粗粒砂混じりシルト。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

SD9はB地区北側、SD10はC地区で検出した。いずれもごく一部を確認したにとどまり全形は不明である。SD9は東肩がSD8に沿っていること、埋土を共通することから溝の一部と判断した。幅は0.20m以上、深さは0.05mを測る。遺物は出土しなかった。SD10は周辺に搅乱があり、ごく一部のみ検出したが、流向からSD8と直交することが考えられる。SD8と一体化しL字形を呈する可能性がある。埋土は褐灰色(10YR4/1)粗粒砂混じりシルトを主体とし、暗褐色(10YR3/3)細縞を小ブロック状に含む層である。土師器・須恵器・瓦器が出土した。遺構面のベース層である第5層から土師器皿が出土したことから、おおむねA地区遺構面Ⅰの遺構と大きな時期差がないものと考えられ、所属時期が室町時代にさかのぼることはないと推定される。



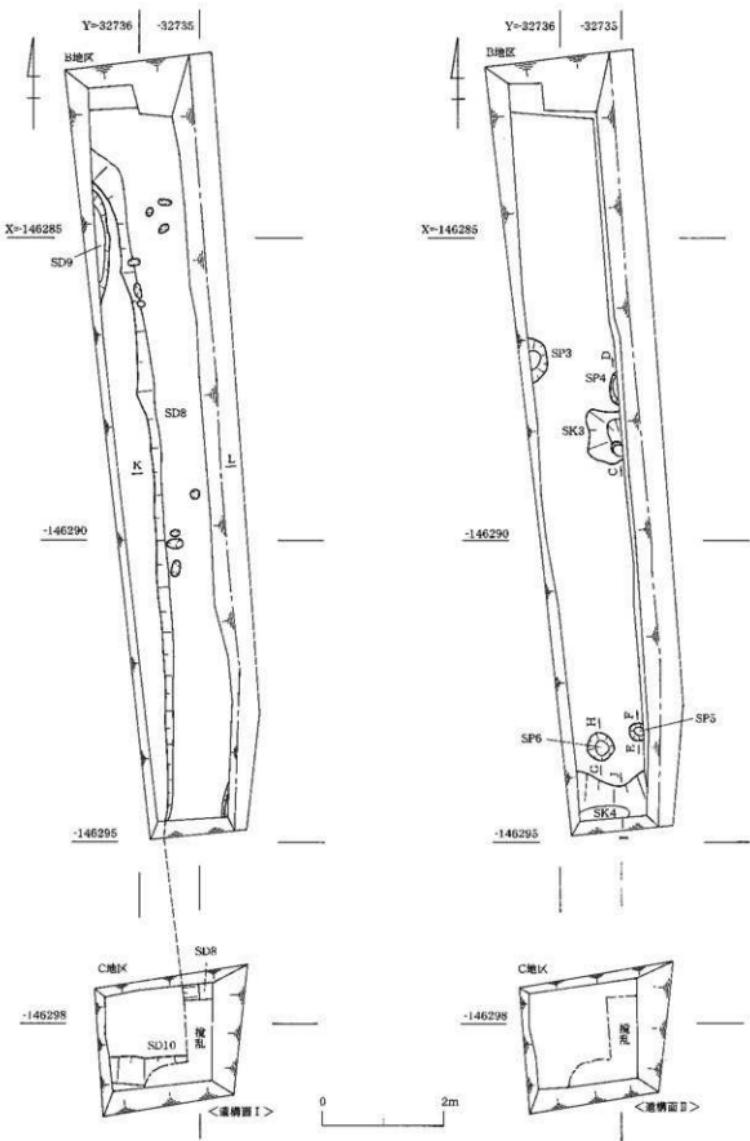
第7図 A地区遺構面Ⅰ遺構掘削後状況(北から)



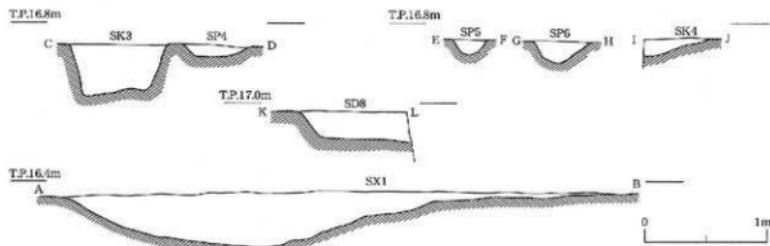
第8図 A地区遺構面Ⅱ SXI 挖削後状況(北から)



第9図 B地区遺構面Ⅰ 遺構掘削後状況(南から)



第10図 B・C地区造構平面図



第11図 主要遺構断面図(A~Lは第6・10図の記号と対応)

遺構面IIは第6層上面で検出したもので、土坑2基・ピット4個がある。

土坑 SK3はB地区の中央で検出。平面形は方形、断面形は播鉢形を呈する。土坑の南側でピット状の掘り込みが見られる。長径0.86m、短径0.55m以上、深さ0.43mを測る。埋土は灰色(N4/0)粘土に黒褐色(2.5Y3/2)粘土が小プロック状に混入する層である。細繊を含む。土師器・弥生土器が出土した。

SK4はB地区の南端で検出。平面形は不定形を呈するが、遺構の中位から底面にかけて断面形が播鉢状をなすことから、土坑と判断した。長辺0.80m以上、短辺0.50m以上、深さは現況で0.42mを測る。埋土は2層に区分される。①層は暗灰色(N3/0)粘土を主体とし、オリーブ黒色(5Y3/2)細繊混じり粘土質シルトと黒褐色(2.5Y3/2)細繊のブロックが少量混入する層である。②層は暗灰色(N3/0)粘土と黒褐色(2.5Y3/2)粘土の混合土。細繊を含まない。遺物は出土しなかった。

遺構面IIでは、SP3・SP6、SK3で土師器が認められることから、A地区と異なり、これらの遺構の所属時期が中世期に下ることが考えられる。いっぽう、既往の調査で中世期の遺構と弥生時代の遺構が同一面で検出されることがあり、SK4の埋土がSX1のそれと近似することから、SK4に関しては弥生時代に属する可能性が考えられる。

4 出土遺物

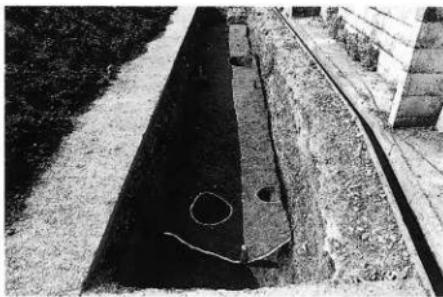
弥生時代～中世期の遺物が出土した。遺構および遺物包含層に分けて記す。

SK 2 出土土器（第13図1・2） 弥生土器が出土した。

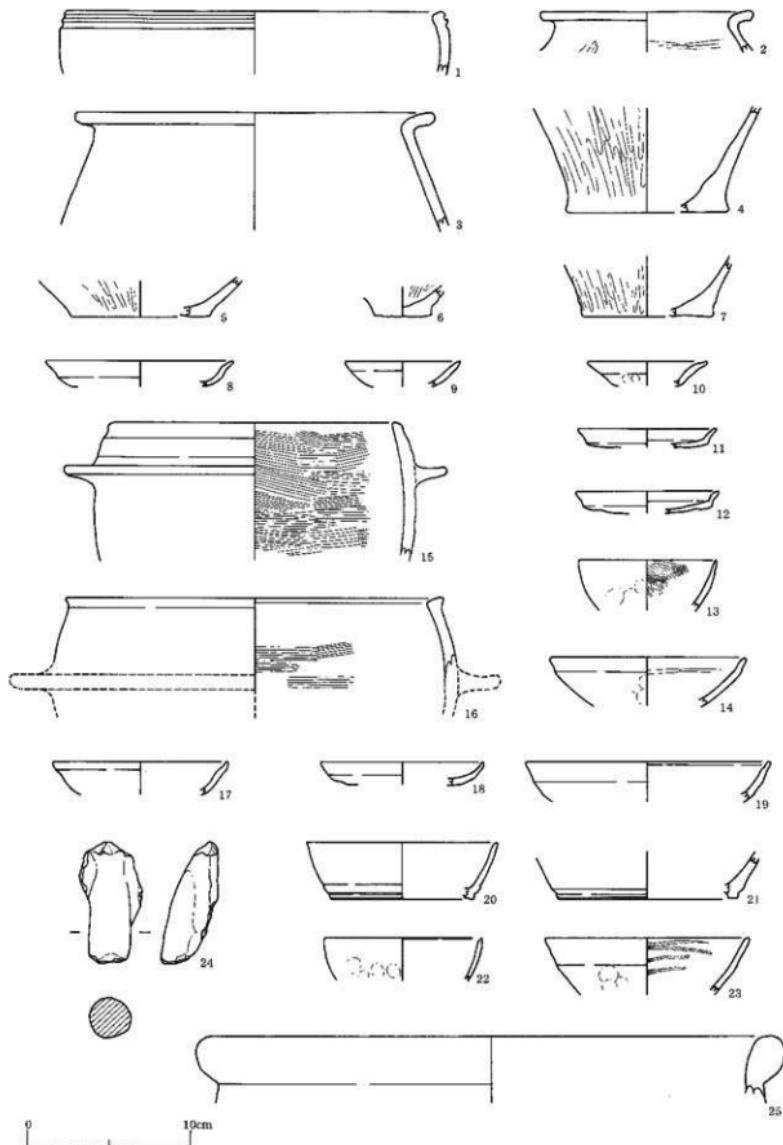
1は鉢である。体部は内傾して立ち上がる。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は面を持つ。口縁部外面に2条の凹線文を施す。摩滅が著しく、調整法は不明である。生駒西麓産。Ⅲ～Ⅳ様式。2は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。摩滅が著しく、調整法は不明である。生駒西麓産。Ⅲ～Ⅳ様式。

SX 1（第13図3～7） 弥生土器が出土した。

3は甕である。体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持つ。摩滅が著しく、



第12図 B地区遺構面II遺構掘削後状況(南から)



第13図 出土遺物実測図

調整法は不明である。生駒西麓産。Ⅲ～Ⅳ様式。4～7は底部である。平底を呈する。外面はヘラミガキ調整する。内面はナデ調整するものが多く、6はハケメ調整する。生駒西麓産。Ⅲ～Ⅳ様式。

SD 8 出土土器 (第13図 8～16)

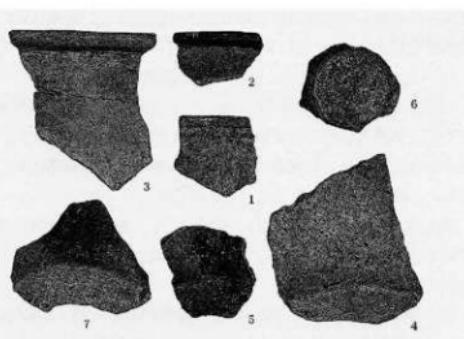
土師器、瓦器が出土した。

8～12は土師器の小皿である。口縁部内外面はヨコナデ調整する。口縁端部が尖り気味に終わるものと丸く終わるものがある。8～10は体部外面に指頭圧痕が残る。11・12は底部がやや丸みを帯びた平底を呈する。底面に指頭圧痕が残る。8～10は14世紀。11・12は13～14世紀。

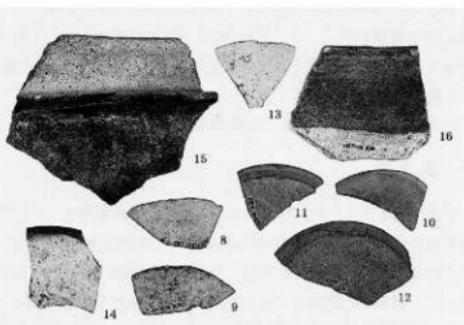
13～16は瓦器である。椀、羽釜の器種がある。13・14は椀である。13は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。内面はハケメ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。14世紀。14は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部は小さく外反する。内面に螺旋状の暗文を施す。体部外面に指頭圧痕が残る。13～14世紀。15・16は羽釜である。体部の張りは小さく、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。鉗は水平方向へ延びる。内面はハケメ調整する。15は口縁部外面に2条のゆるい段が付く。14～15世紀。

SP 6 出土土器 (第13図17)

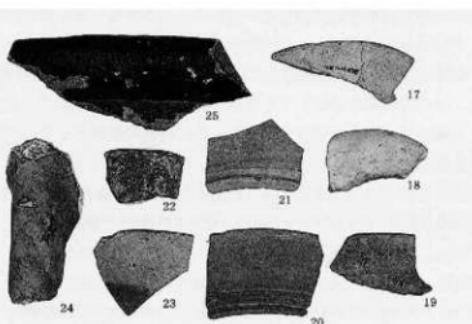
土師器が出土した。17は土師器の小皿である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り



第14図 出土遺物写真(1)



第15図 出土遺物写真(2)



第16図 出土遺物写真(3)

気味に終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。14世紀。

遺物包含層出土土器（第13図 17～25）上師器、須恵器、瓦器、備前焼がある。

18・19は土師器である。小皿、杯の器種がある。

18は小皿である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部が丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。A地区第4層から出土した。12世紀。19は杯である。体部は外上方に立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。A地区第2層から出土した。8世紀。

20・21は須恵器の杯である。平底を呈し、断面形が方形の高台が付く。内外面を回転ナデ調整する。20は体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味に終わる。20はB地区の第2層、21はA地区の第3層から出土した。9世紀。

22～24は瓦器である。楕、羽釜の器種がある。22・23は楕である。22は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に終わる。口縁部内面に1条の沈線を施す。体部外面に指頭圧痕が残る。A地区的第3～4層から出土した。14世紀。23は体部が外上方へ立ち上がり、口縁部は小さく外反する。口縁端部は丸く終わる。内面に螺旋状の暗文を施す。口縁部外面はヨコナデ調整する。体部外面に指頭圧痕が残る。A地区的第3～4層から出土した。13～14世紀。24は羽釜の脚部である。先端で細くなる棒状を呈する。断面は円形である。体部との接合面をナデ調整する。A地区的第3層から出土した。14世紀。

25は備前焼の壺である。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は玉縁状を呈する。14～15世紀。

5まとめ

第1次調査では、鎌倉時代～南北朝時代(13世紀後半～14世紀前半)の掘立柱建物5棟・土塙墓2基をはじめ井戸・土坑などが濃密に検出され、中世屋敷地の様相の一端が明らかになるなど大きな成果が得られた。今回の調査でも同様の遺構検出が期待されたが、分布は散漫でかつ遺物の出土も少量であった。これは第1次調査断面図にあるように、中世期の遺構面が、調査地南側の自然河川の影響で緩やかに南へ傾斜し、中世期以降の耕作活動に伴って、遺構面が大きく滅失していることに起因するものと考えられる。第1次調査の中世期遺構配置図を見ても掘立柱建物を構成するピットは調査地の中央から南端にかけて顕著であって、北側では井戸・溝など深い遺構のみ遺存する状況であった。ただし、中世期の遺構面が今回の調査地で収まるかどうかは今後の調査に待すべきと思われる。

今回の調査で検出した弥生時代のSX1の性格を考えるために、第1次調査検出の落ち込みSHC1とSHC2との位置関係の図面を作成してみた(第17図)。これらの位置関係や第1次調査の壺棺墓の存在から、方形周溝墓を想定してみたが、溝間は15mほど隔たり、隣接する西ノ辻遺跡や鬼虎川遺跡のそれと比較して、巨人すぎる結果となった。今後の課題としていきたい。

参考文献

財團法人東大阪市文化財協会1997a『植附遺跡第2次発掘調査報告』(『東大阪市文化財協会概報集-1996年度(1)』)

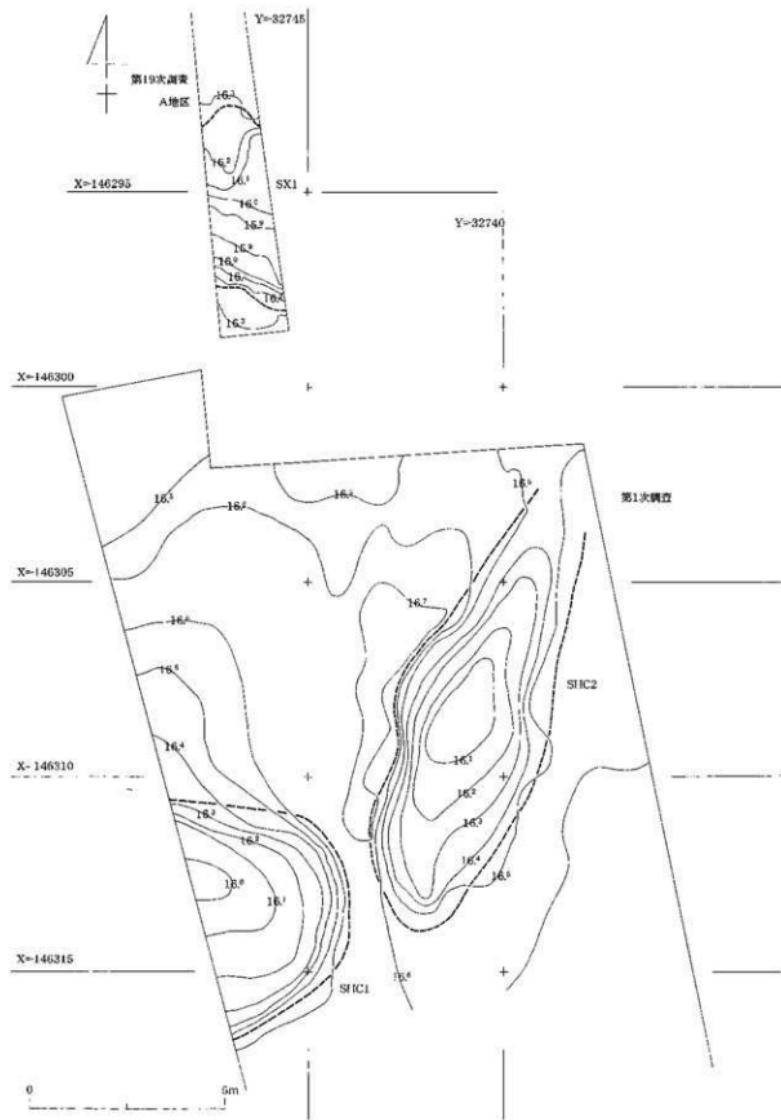
財團法人東大阪市文化財協会1997b『植附遺跡第3次発掘調査概報』

財團法人東大阪市文化財協会1999『植附遺跡第5次発掘調査報告書』

財團法人東大阪市文化財協会2002a『植附遺跡発掘調査報告集-第1・6・12・15次調査』

財團法人東大阪市文化財協会2002b『植附遺跡第11次発掘調査報告』

松田順一郎1996「北島遺跡の地質・地形と周辺の遺跡群」(財團法人東大阪市文化財協会『北島遺跡の耕作地跡と古環境』所収)



第17図 第19次調査SX1と第1次調査落ち込み(yaHLW)の位置関係と等高線図
 (財団法人東大阪市文化財協会2002a所載図をもとに合成、編集。X・Yの座標値は世界測地系に変換)

報告書抄録

ふりがな	そうこけんせつにともなう うえつけいせきだい19じはくつちょうさ がいほう					
書名	倉庫建設に伴う 植附遺跡第19次発掘調査概報					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	菅原章太・武田雄志					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-8521 大阪府東大阪市荒本北一丁目1番1号 TEL06-4309-3283					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	2009年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査面積	調査原因
うえつけいせき 植附遺跡	ひがしおおさかしにしいしきりちょう 東大阪市西石切町1丁目 52・53番地	27227	39	平成20年 4月28日～ 5月16日	46.7 m ²	倉庫建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落跡	弥生～ 室町時代	落ち込み・土坑・ 溝・ピット		弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦器		

倉庫建設に伴う
植附遺跡第19次発掘調査概報

発行日 平成21年3月31日
編集・発行 東大阪市教育委員会
〒577-8521 東大阪市荒本北一丁目1番1号
TEL 06-4309-3283
印刷所 グランド印刷